

リスク社会時代の児童文学

第二回 中間集団のリスク化

目黒 強



一 はじめに

明治以降、子どもたちは家庭・学校・社会において保護されるとともに管理されてきた。もちろん、近代社会による保護と管理の網の目から零れ落ちていた子どもたちは少なくないし、保護と管理のあり方に問題がなかった訳ではない。しかしながら、子どもの保護と管理を期待できる安心社会が目指されていたとはいえるだろう。

このような安心社会は高度経済成長期に達成されたよう^①だ。山田昌弘によれば、「企業の男性雇用の安定と収入増加」・「サラリーマン―専業主婦型家族の安定と生活水準の向上」・「学校教育の職業振り分け機能の成功と学歴上昇」により、「生活の安定と向上が保証されていた」という^②（二一〇頁）。「中間集団（ならびに保険システム）が、人々が生活リスクに出会うことを防ぎ、生活リスクに出会

ったとしても、出会った人々を守ってくれていた」（守ることが期待できた）のである（五五頁）。ちなみに、ここでいう「中間集団」とは個人と国家の間にある家庭・学校・企業などを指す。

しかしながら、一九九〇年頃から個人を生活リスクから守ることが期待されてきた中間集団そのものがリスク化し、現代人は裸のまま様々なリスク（子どもの場合、虐待・いじめ・保護者の失業等）に直面することになる。

そこで今回は、中間集団のリスク化を描いた作品を検討することにしたい^③。

二 家庭のリスク化

まずは、家庭のリスク化を描いた作品として、いとうみく『カーネーション』（くもん出版、二〇一七年）を取り上げる。